悪魔は彼の中に住む

正体不明.

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二代目悪戯仕掛け人と謳われホグワーツで最も有名と言われている四人組がいる。これはその悪戯四人組の一員のリューゲ・レイ（Ｌｕｅｇｅ・Ｗｒａｙ）が決定された物語の中でもがくお話。

《注意》

・クロスオーバーですが東方Ｐｒｏｊｅｃｔのあるキャラクター、ある要素が所々で出て来る程度です。

・更新はいきなり止まったりする可能性があります。

・チート系です。序盤はそこまでではありませんが五作目以降は完全にチートです。

以前、「普通」の占い師のちょっとした英雄譜、として連載していたものを改訂しました。

今後とも宜しくお願いします。

また、以前とは内容が一部変化しております。ご了承下さい。

用事が増えたので更新が亀レベルとなります。

その分一話一話の量を増やしていこうと思っているのでこれからもよろしくお願いします。

目次

序章　悪戯四人組の四重奏　《Mischief four threesome of quartet》

1　悪戯四人組 ―― 1

2　近付く決行の日 ―― 12

3　Trick or Treat! ―― 14

4　近付く冬 ―― 20

5　クリスマス休暇と獅子寮の謎 ―― 24

6　夜の冒険と忍びの地図 ―― 29

7　ただいま、お帰り ―― 32

8　大繁盛 ―― 35

序章　悪戯四人組の四重奏　《Ｍｉｓｃｈｉｅｆ ｆｏｕｒ ｔｈｒｅｅｓｏｍｅ ｏｆ ｑｕａｒｔｅｔ》

１　悪戯四人組

イギリス、ロンドン、キングスクロス駅でせかせかと歩くマグル達は気付かない。自分達のすぐ近くに、自分達の領域に異物がいることに。自分達が知らないところで自分達の安全は脅かされていることに。

もし何らかの原因で彼らがキングスクロス駅の不思議な柱の秘密に気づいたら世界はどんな風に変化するのだろうか？

そんないくら考えても意味のない事を自分が考えていたことに気づき、最後尾のコンパートメントで窓の外の別れを惜しむ家族の様子をぼんやりと眺めていたリューゲは微かに口角を上げた。

リューゲはこれまで魔法というモノを誰に教えてもらったわけでもないが何となく理解していた。基本的にマグル生まれは自分の周囲でおかしな事があってもたまたまだと思うがリューゲは自分を捨てた両親の手紙を読む前から魔法を理解し、操っていた。と、言っても本物の魔法を使っていたわけではないがモノを揺らしたり粉々にする程度はできた。

何故自分だけそれを認識できたのか？　はっきりとした原因は分からないがおそらく自分の経験のおかげだろうとリューゲは考えていた。とある事情により一般的にスラム街と呼ばれるような環境で暮らしていたリューゲにとって大人相手でも勝つ事ができる、他者に勝る力は欲して止まないものだった。故に自分の身の回りで起こる不可思議な出来事を偶然だと思わず、目を背けずにその力を自在に操れるようにしようとしていた。

十一歳の誕生日の日。不思議な力を使いスラム街でもだいぶん安定した地位を得られていたリューゲは昨日稼いだカネで買ったそれ

なりに豪華な誕生にケーキに火をつけていた。そしていざ食べようと思った時に黒づくめの男がリューゲの寝床を訪ねてきた。

一番最初に要件を聞いた時は新興宗教の勧誘、或いは犯罪ごとだろうと思っていたが男がリューゲの性と名を偽名ではなく正しく言ったことによってリューゲは男の言う事を信じた。基本的にリューゲは偽名を使っている。ルーク、アーク、トム、マーク、カイル、クライス、全てリューゲの偽名だ。他にも軽く二十種類近くは偽名がある。

自分の本名を辿ることはほぼ不可能。となると後ある可能性は自分がスラムに来る前から自分を監視していたか、それこそ魔法でも使えるかだがリューゲからしたらまだ後者の方が信憑性があった。

そしてその後しばらく男に魔法界に関しての質問をした後リューゲは男の勤務先でもあるホグワーツ魔法魔術学校への入学を決めた。金銭面は生活を切り詰めれば工面できる程度の学費である上に力の使い方を学べる。リューゲからしたら最高の環境だった。

入学を決定した後は男　―名はセブルス・スネイプと言った―　について必要な品を買うためにダイアゴン横丁に行ったり書類を書かされたりと色々と大変だったがなんだかんだでまだ十一歳のリューゲは初めて見ることだらけの魔法界を満喫していた。

学用品は奨学金でどうにかなると行っていたが借金は御免なので結局「仕事」で稼いだ金を両替し全て自費で購入した。個人的に一番興味が引かれたのは箒だったがその事はスネイプにもバレていたようで一年生は箒を持ってはいけないしかなり高いぞ、と釘を刺された。

また、杖に関しては両親の遺品の中にそれっぽいものがあったので杖作り職人とやらに見せると危険だが素晴らしい杖（？）でホグワーツで使うにも問題ないだろうと太鼓判を押されたのでそれを使うことにした。スネイプにも最初は反対されたが粘り強くこれ以外はあり得ないと言うと渋々使用を許可してくれた。最初は仏頂面で心が読めないしぶっきらぼうな人だと思っていたがなんだかんだで結構面倒見がいい人だった。

そしてそれから早四ヶ月。リューゲはホグワーツへと向かう汽車に乗っていた。
正直こちら側への入り口である柱を見た時はあんな目立つところに魔法界への入り口を置いておくとは魔法族は馬鹿なのか？　と思ったりしたがパブ　漏れ鍋と一緒で非魔法族たちが一切気づいてない様子を見てリューゲは改めて魔法の力を思い知った。

また思考が余計な方向にそれているのを感じたリューゲは窓の外から目をそらし教科書を読む。勉強なぞ大嫌いだがもし下手に赤点などとって落第にでもされたらたまったものではない。なのでいちど教科書のテストに出そうな大事な部分だけ丸暗記し授業中はサボろうと言う魂胆な訳である。
教科書を再び読み始めてから何分経っただろうか。
「なぁここの席いいか？」
リューゲが気が付くと目の前に燃える様な赤毛の少年二人と肌と髪が黒い少年が立っていた。赤毛の少年二人は双子の様にそっくりで声も全く同じだ。なんと返せば良いのか一瞬迷ったが一人旅よりも大勢の方がいいと思いリューゲは返事を返す。
「あぁ好きに座りなよ。俺は特に連れもいないし」
その言葉を聞くと赤毛の二人はリューゲの向かい側の席に、もう一人はリューゲの隣の席に座った。そして赤毛の二人の内奥の方に座った少年が話し始める。
「ありがとな。俺はフレッド・ウィーズリーで隣がジョージ。双子だ」
リューゲは顔には出さず内心納得していた。双子ならこのそっくり具合も頷ける。おそらく一卵性双子だろう。そこまで考えたところで今度はリューゲの隣の少年が話し始めた。
「俺はリー・ジョーダン。そいつら二人とは今会ったとこ。他所はどこも満員だったから助かったよ」
リューゲは頭の中で三人の名前を復唱する。フレッド、ジョージ、リー。基本的に物覚えはいい方だが人の名前は忘れっぽいのだ。今

自己紹介をしてもらったのに名前を間違えたりしたら失礼だろうと思い幾度か復唱する。この流れからしておそらく次は自分の番だろうと思いリューゲは口を開く。
「俺はリューゲ、リューゲ・レイだ。お前らも新入生か？」
　名前を言った後リューゲは気になっていた事を三人に訊ねる。フレッドとジョージは背が高いので一見すると三年生程度にも思えるがリーは比較的小さい。
「お前らも、ってことはリューゲも新入生か。俺たちも全員今年からだ」
「ということで」
「これから」
「「ヨロシクな！」」
　リーの言葉の後のフレッドとジョージの双子らしい息のあったコンビネーションにリューゲは思わず吹き出しそうになる。
　ふと窓の外を見るといつの間にか汽車はキングスクロス駅を出て大草原を通っていた。都会育ちのリューゲにはそれは初めて見る光景で一瞬見惚れてしまうがここで返事を返さないと、と思い慌てて三人にこちらこそ、と言う。その様子が壺に入ったのかリーが笑う。そして笑われた事にイラついたリューゲが軽く頭を叩きそれをワザとらしく痛がるリーにフレッドとジョージが大爆笑し……いつの間にか四人は昔からの友の様に仲良くなっていた。
　その後は色々な事を話し合ったりミニゲームをしたりして盛り上がった。
　特に盛り上がったのはホグワーツ特急での新入生の恒例行事でもある百味ビーンズ大会。リューゲは青リンゴ味というだいぶマシな味だったがリーは石鹸味、フレッドは雑草味、そしてジョージは腐った卵味と散々な結果で終わった。
　他にもポーカー、七並べ、人狼ゲーム、陣取りゲーム、神経衰弱、大富豪、真実か挑戦か、ババ抜き、ダウトと、あらかたのパーティーゲームをやり終えてもまだホグワーツに着くには三十分ほどかかるためどこの寮に入るか、という話になった。

「俺とフレッドは間違いなくグリフィンドール！なんせ一族みんなおんなじだからな」
「ある意味予想通りすぎて面白みに欠けるよな～」
フレッドとジョージは魔法界で古くから続く純血一族だがマグル嫌いでは無くみんなグリフィンドールらしい。ちなみにウィーズリー家は子沢山らしく二人は上には三人の兄、下には弟と妹がいる、と言っていた。
「俺は分かんないけど出来れば三人と同じところがいいな。リューゲはどうなんだ？」
リーは特に一族で入る寮が決まっているわけでは無いらしい。リューゲは正直どの寮だろうとどうでも良かったが三人と一緒がいい、という点ではリーと同じだった。
「俺は多分グリフィンドールかスリザリンだと思うが…まぁなんにしろお前らと一緒ならどこでもいいや」
ガチャン！
そこまで話したところで大きな音が響き汽車が揺れる。汽車が止まったのだろう。
「ようやく着いたのか？」
「そうみたいだな」
三人と話しながらコンパートメントを出て汽車を降りる。九月のイギリスの夜は肌寒く真っ暗だった。悪い視界の中で辺りを見渡すとランタンを持った大きな男が叫んでいる。
「イッチ年生はこっちだ！」
段々と人が集まり大男は汽車の中にまだ人がいないか確認するとその場で待機していたリューゲ達について来るよう言い歩き始める。前日雨でも降っていたのか地面はベチャベチャで歩きにくい。
「新品のローブなんてきてこなくて良かったな」
「この道を新品ローブで歩いたらお袋にぶん殴られるよ！」
リューゲがふと漏らした言葉にジョージが笑いを取ろうとしているのかふざけ調子で返す。
リューゲがジョージの母親がどんな人か気になり聞こうとした瞬

間視界が開け目の前にある湖の向こうには古ぼけた、何処か雰囲気のある古城が建っていた。
「ボートに乗れ！」
大男の言葉を聞き新入生たちは次々にボートに乗る。リューゲは三人と一緒にボートに乗り込んだが四人は先程までの様に軽口を叩き合うわけでもなく城を見ていた。ボートから見るホグワーツはこの上なく幻想的で美しい景色だった。リューゲはその光景に感動と同時にどこか違和感と懐かしさを感じていた。

ボートでの幻想的な旅はあっという間に終わってしまいいつの間にかリューゲ達はホグワーツ城内部で服が乱れていないかチェックしていた。大男に連れられてホグワーツ城に入った後は厳格そうな副校長が寮システムの説明をして身だしなみを整えておく様言い残して出て行った。
「どうやって組み分けするか知ってるのかフレッド？」
「お楽しみだとか言って教えてくれないんだよなぁ～」
リューゲはホグワーツに兄がいるというフレッドに質問をするが家族皆教えてくれない、と言っていた。リーも父親が楽しみにしておけとだけ言って他は教えてくれないらしい。
他の新入生も組み分けについてあちこちで小さなグループに固まり話し合っている。新入生は百人程度いるのだから時間がかからない方法の筈だが、と思いリューゲは組み分け方法について考えていると再び扉が開き副校長が入ってきた。
副校長に連れられ向かった先は大広間だった。重々しい扉が開くと向こうには約千人ほどの生徒達と教師陣が席に座っていた。これから組み分けの儀式を始めます、と副校長が生徒が座る四つの大テーブルと教師陣が座る大テーブルの間に追われた椅子に古ぼけた帽子を置きながら言う。リューゲがあの帽子はなんだろうと思いじっくり観察していると突然帽子が歌い始めた。
「私は組み分け帽子。ボロくて変でも組み分け帽子。キミの頭を覗いてみよう。

勇敢なるものはグリフィンドール！
知識を愛するものはレイブンクロー！
忍耐強く優しいものはハッフルパフ！
狡猾だが仲間思いはスリザリン！
きっとキミに合う寮をみつけよう。だって私は組み分け帽子！」
生徒や教師が一斉に拍手をする。歌の内容からしてこの帽子が組み分けを行うのだろうとリューゲは考える。そしてこの反応からしてこれは恒例行事、ということなのだろう。
拍手はずいぶん長い間続き漸く終わると副校長が長い羊皮紙を持って組み分け帽子の隣に立つ。そして一人生徒の名を呼ぶと呼ばれた生徒は前に出て帽子を被らされた。数十秒後帽子はスリザリン！と叫び帽子をかぶっていた生徒はスリザリンが集まっているテーブルに向かう。その間呼ばれた寮の生徒は拍手や歓声を上げていた。
その後もどんどん名前は呼ばれていく。リューゲは呼ばれていく順番がアルファベット順なのに気づく。自分はWなのでかなり最後の方だと思いリューゲが安心しているとリーの名前が呼ばれる。緊張している様でぎこちない仕草で帽子をかぶる姿を見守る。そして帽子はグリフィンドール！と叫んだ。リーは安心した様にグリフィンドールのテーブルへと向かっていった。これで後は自分がグリフィンドールに入れば４人が揃うだろうと思いリューゲは溜息を吐く。これまで友達など作れなかったリューゲにとって一緒にいた時間は僅かでもすでに三人は掛け替えのない存在になっていた。
組み分けはどんどん進みあっという間にリューゲの番となった。
「Ｗｒａｙ・Ｌｕｅｇｅ！」
名を呼ばれて前に出る。視線が集まっているのを感じ少し体が強張る。
椅子に辿り着くまで実際は三十秒もかかっていないのだろうがリューゲには一時間もかかっている気がした。
漸く辿り着き椅子に座って帽子を被るとリューゲの頭の中では声が響いていた。
（ふむふむ。なかなか面白い子が来たようだ。適性はグリフィンドー

ルとスリザリンだが…）
　リューゲはその声に話し掛ける。
（組み分け帽子…なのか？　俺はグリフィンドールに入りたい）
（その通り。私は組み分け帽子だ。しかし、本当にいいのかね？グリフィンドールに入って）
　組み分け帽子は愉悦を感じさせる様な声でリューゲに話し掛ける。対するリューゲは…この帽子を細かく分解したい気持ちでいっぱいだった。もともと機械いじりは大好きなのだが相手の頭に直接話し掛けるなんて分解しがいがある。
　そしてその感情を感じた組み分け帽子は…
「グリフィンドール!!!」
　脅されているのだと勝手に勘違いしていた。リューゲは別に脅している気なんてさらさら無かったがまぁ結果オーラかだ。この時点で組み分け帽子にグリフィンドールに入るということの〝意味〟を知らされずにすんだのだから。
　リューゲは勝手に話を切ってしまった組み分け帽子に少し苛立ったが望み通りのグリフィンドールには入れてくれたのでまぁよしとしようと思い拍手と歓声を上げるグリフィンドールの長テーブルへ向かった。
　テーブルに座ると先に座っていたリーが満面の笑みで話し掛けてくる。
「やったなリューゲ！フレッドとジョージはほぼ間違いなくグリフィンドールだろうから四人一緒だよ！」
「あぁそうだな。そしたら汽車で話したあの計画を実行しよう」
　二人で話していると今度はフレッドの番になる。フレッドはいつも通り、というか全く緊張してなかった。そして当然の様にグリフィンドールにやって来た。続くジョージも普通にグリフィンドールに決定。
　グリフィンドールのテーブルにやって来た二人はリューゲとリーの隣に座った。リューゲは二人に話しかけようとするが校長が話し出したので話を聞いておくことにして開きかけていた口を閉じた。

「さてこれで今年度の組み分けの儀式はお終いじゃ。もう皆腹が減ったと思うので長い話はやめにしておこうかの」
かなり短い校長の話を聞きながらリューゲはアルバス・ダンブルドアに関しての記憶を思い出そうとしていた。二十世紀最も偉大な魔法使いと言われペットに不死鳥を飼っている。例のあの人の最盛期には対抗するための組織を率い、戦った。リューゲはある目的があるためダンブルドアに関してのものであればどんな些細の情報であろうと欲しかった。
ダンブルドアが指を軽く鳴らすとそれまで何も無かったテーブルに一斉に豪華な食事が現れた。そして生徒一人一人の前には既に中身が入れてあるゴブレットが置かれていた。
「それでは…乾杯！」
幾ら魔法界といえど未成年である以上酒は飲めないので水か何かだろうと当たりをつけたリューゲは周囲の上級生に習って校長の乾杯、の瞬間ゴブレッドの中身を一気に飲み干した。ゴブレットの中身は甘味がしたので水では無かったのだろうが美味しかったし第一学校で生徒にヤバイものを飲ませるわけ無いだろうと思い一気飲みしたリューゲはゴブレットをテーブルに置いた後同じく一気飲みしていた三人に話しかける。
「やっぱアルバス・ダンブルドアってちょっと変わった人だな」
「まぁそれ以上に偉大な人だし天才の思考は理解できないからな」
「「リーの言う通り」」
相変わらず双子のコンビネーションは抜群だった。リューゲはところで、と話を変える。
「汽車の中で話したことなんだけど本当にやるのか？」
「当たり前だ。俺はずっとやってみたくて仕方なかったんだからな」
リューゲの質問に大きく首を縦に振りながらフレッドは返事をする。同じ様にその横ではリーとジョージが首を縦に振っていた。その様子を見てからリューゲは当たりを見回し自分達に視線が集まっていないことを確認してから声を潜めて言った。
「Ｏｋ。分かったよ、じゃあハロウィンの日に実行しよう。俺に心当

たりがある」
　リューゲの言葉に三人は驚きの表情を顔に浮かべる。なんせ彼らがやろうとしているのは…ホグワーツの教師陣全員を敵に回す前代未聞で史上最大の”悪戯”であり成功する確率は良くて一％の計画だからだ。それに心当たりがあると言われたら誰だって驚くだろう。
「おいマジかよ。本当に？」
「俺は嘘は好きだがくだらない嘘は嫌いだ。この計画は絶対に成功させる。取り敢えず本格的な計画は寮の部屋で話し合おう。今は腹が減った」
　リューゲの腹が減ったと言う言葉に三人はそれまで忘れていた空腹を再び感じ皿に料理を取り分けガツガツと食べる。成長期の十一歳の少年だ。たくさん食べるに決まってる。

　そして数十分後少年たちの腹は満ちデザートまで食べた彼等が再び喋り出そうとすると又しても遮る様に校長が話し始めた。
「皆様子を見るによく食べよく飲んだ様じゃ。さて、今年度の新任の教ーーーー」
　リューゲは正直眠くてほとんど話を聞いていなかった。唯でさえ長時間の旅で疲れていたのに緊張したり興奮したりで大分疲れていたのだ。もう瞼が落ちる寸前のところで漸く校長の話は終わった。
「ーーーーーのじゃ。それと昨年度校歌に対しての否定的な意見が多かったのでの、今年は校歌は歌わんことになった。それでは皆　寝る時間じゃ新入生は監督生に寮に関して説明を受けた後に眠る様に以上！」
　監督生に先導され寮に向かいながら　何故か校歌の下りで教師陣から安堵の溜息が聞こえたので相当酷い校歌なのか、などとリューゲが考えているといつの間にか一行は太った貴婦人の肖像画の前に到着していた。
「三人兄弟！」
　先頭に立った監督生が肖像画について説明した後合言葉を叫ぶと貴婦人が何か文句を垂れながら扉を開けた。合言葉は一週間おきに

変わるらしいので面倒だなと内心リューゲは思った。
今年の監督生はよく知らない先輩だったが今年の主席はフレッドとジョージの兄のビルという人だった。リューゲの第一印象はモテそう、だ。長い赤毛をポニーテールにしたイケメン。街中を歩いていたら逆ナンパされてしまうレベルだ。
大家族だけあってフレッドとジョージの兄弟はビルを含めて三人もいた。
上からビル、チャーリー、パーシー、フレッドとジョージに弟一人と妹だそうで、ジョージ曰くビルは完璧イケメン、チャーリーはドラゴン馬鹿、パーシーは優等生様、弟は平凡、妹は天使らしい。
妹とビル以外褒めていない事は気にしないでおこう。というかパーシーと弟は可哀想だ。

こうやって考えるとなんとも個性溢れる家族だとリューゲは自室のベッドに寝転がりながら考えていた。寮の中に入った後は小さな歓迎会や説明を受けていたので部屋に来る頃にはもう就寝時間になっていた。
「で、結局その作戦てのはなんなんだ?」
幸運なことにルームメートはちょうどよくフレッド、ジョージ、リーの三人だったため四人は今早速悪戯の計画を立てていた。
「それがな、まずーーー」
こうして夜は更けていく……

2　近付く決行の日

アインス・グレースは苛立っていた。
グレース家は聖２８族　程ではないがかなりの名家だった。故に幼い頃から英才教育を受けて来ていたアインスは常に一番だった。魔法でも筆記でも魔法薬の調合でも箒に乗るのも、全て一番だった。
元の才能もあったが何よりもアインスは常に努力していた。
だから、だったのだろうか？　ホグワーツに入ってから自分が一番じゃ無いことに怒りを感じた。
ー自分はこんなにも努力しているのに何故!!ー
最初に奴の名前を知ったのは変身術の授業だった。授業終了直前にマッチを針に変化させた自分を嘲笑うように教師はレイは数秒で変化させた、と言った。たまらなく悔しかった。
だがそれは何度も続いた。魔法薬でも妖精の呪文でもいつも一番だった。
レイブンクローでは一番でも一度も本当の一番にはなれなかった。ある日レイに意を決してどんな風に勉強しているのか聞いてみた。レイはなんでも無い風に答えた。
ー予習？んなの汽車でやった後はなってねぇよー
事実レイは授業以外で勉強していなかった。
悔しかった、その才能が。自分が必死になって掴んだものを簡単に掴んでしまう力が。
だから…絶対に勝てるはずの勝負で挑んだ。万全の状態だった。
そして負けた、完膚なきまでに圧倒的力を見せつけた挙句アインスを助けてレイは勝った。その飛行技術を評価されレイはグリフィンドールの次期シーカーになった。レイブンクローの寮生からは余計な事をするな、と言わんばかりの視線を向けられた。
けれど…アインスは救われた。
ーありがとな、お前のお陰で空を飛ぶってことの楽しさをしれた。お前すっげぇ飛ぶの上手かったよー
たったそれだけの言葉でアインスは救われた。

レイはもう自分の事など覚えてないだろう、とアインスは思う。
アインスは「普通」だ。どこまで言っても平凡な子供だ。
しかしレイは違う、レイは言うならば主人公だ。彼を中心にして世界が回っているようなそんな奴。
文字通り住んでいる世界が違うのだ。
だが、アインスは思う。
ー僕は君を決して忘れない。例え叶わぬ願いでもいつか君と肩を並べたいー

少年はいつの間にか大きく成長していた。
結局生涯少年が彼と肩を並べることはないだろう。が、こんなほんの些細で小さな出来事で少年は後に歴史に己の名を残す人物となる。
「彼」は運命を変えた。ほんの些細な一人の運命？いや少年は大きな働きをした。
決して些細な運命などでは無かった。
どうして彼は運命を変えれたのか？主人公だから？それとも…
これは彼とその隣に立っていた者達の「反逆」の物語……

3　Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔ！

ご馳走で一杯のハロウィンの晩の大広間はホグワーツ名物ともいえるだろう。

しかしながら残念なことにリューゲはかぼちゃは好きでは無い、というか寧ろ苦手なのでテーブルに所狭しとかぼちゃ料理が並べられている様には少し引いた。

最もホグワーツの屋敷しもべ妖精の腕は良く、かぼちゃが苦手なリューゲもさして苦もなく腹一杯になる程か

ぼちゃ料理を堪能出来た。

他の生徒達よりもだいぶ早めに来て物凄い勢いで食事にがっついていたリューゲ達は多くの生徒達が食事を始めて数分経ったことには既にデザートまで食べ終え準備は完璧だった。

「さてさて…そろそろ始めるか？」

「「俺らは大丈夫！」」

「俺は今になって手が震えてきたんだが」

「じゃあその震え止めるために一発殴ってやろうか？」

「やめてくれ、いやマジで！」

よく見ればリーだけでなくリューゲもフレッドもジョージも、微かに手が震えているが四人はその不安を吹き飛ばす様に軽口を飛ばし合う。初めての大規模な悪戯。

入学前からフレッドとジョージが考えていた計画は結局四人が揃って初めて成功する。

計画が上手くいくかは実際の所分からない。だが…

「何は兎も角、千人を相手にこんな大掛かりな悪戯を思いっきり出来るんだ。人生はたったの一度、思いっきり楽しまなきゃ損くらいの気持ちでいくぞ」

「おぉ！我が友よ、なんだか格好良い台詞を言っているがそういう台詞を言うキャラは大抵酷い目にあうぞ」

「それは『俺この戦いが終わったら結婚するんだ…』とか言った奴だよ

！後俺は死亡フラグを立てる様な真似はしないし、リューゲが立ててくれるなんてことはないだろうからジョージよろしく」
「誰が死ぬか。あ、唯これ終わった後鬼化した教師陣に追われる覚悟はしといたほうがいいぞ」
「マジかよ、俺まだ死にたくないんだが」
「おいおいそこは『逝ってきまーす』っていうとこだろ」
「字が違うような気がしたのは気の所為か？」
「気の所為だ。それと安心しろよお前ら、俺が死ぬ時はお前らも道連れだ」
「それは俺らは死ぬ時もお前は一緒になって死んでくれる、ってことか？」
「……俺は幾多もの屍の上に立ちこれからも生きて行く。　リー・ジョーダンの英雄譜　―完―」
「「完じゃねぇよ!!」」
例え何があろうとリューゲ達四人が臆して今更計画を変更、なんて事はない。
悪戯四人組の信念は、「人を楽しませる悪戯こそ最大の娯楽なり！」というジョージの言葉通りする側もされる側も楽しめる悪戯をするというもの。
今の彼らは本番直前のこの緊張感とスリルを心から楽しんでいた。

そしていよいよ悪戯四人組の最初にして最高の悪戯劇が幕を上げる。

フレッドの合図でリューゲとジョージが机の下で杖を振ると大広間を照らしていた何百本もの蝋燭の火が消える。瞬間、大広間は闇に包み込まれる。本来ならば天井に掛かった特殊な魔法のおかげで蝋燭の火が消えても大広間は薄暗くなる程度だが念密な事前計画のお陰でリューゲ達は十数分間だけだが天井の魔法を妨害することに成功していた。

突然真っ暗になったことで生徒達の声は一瞬止んだが、困惑した生徒達の囁き声があちらこちらから聞こえてくる。ただ戸惑っている一年生と違い、上級生達は懐から出した杖の先に小さな光を灯らせながら辺りを見回し警戒する。

光が全て消え去った大広間は夜の森の様に真っ暗で何百人もの光が灯っているのに周囲を見渡すのでさえ夜目がきかないとできない状態だった。

一方そんな生徒達の様子とは真反対に教員達は明かりが消えても杖で僅かな光を出すだけで何も言わない。

何故まだ事態を収拾するために動いていないかというと、昨晩の職員会議で校長に「ハロウィンの晩は何があっても楽しむことが一番じゃ」と、暗に手を出すなと釘を刺されていたからだ。

色々と変人が多いホグワーツの教師達はダンブルドアからのお墨付き、という事もあってかスネイプやマクゴナガルといった教師陣の中では比較的常識のある者以外はこの状況を思いっきり楽しんでいた。そしてスネイプは今すぐこの巫山戯た老人をブン殴って色々と情報を吐かせたい気持ちを必死に抑えていた。

明かりが消えてからそろそろ数十秒経ち多くの生徒達がこれがちょっとしたアクシデントでは無いと確信した頃。カチッ　という小さな機械音が大広間に響くと同時に大広間の入り口付近の一箇所に視線が集中する。

機械音はスポットライトか何かの起動音だったのか真っ暗な大広間の中で一番強い光が宙に浮いているリューゲ達四人の上から降り注ぐ。突然始まった何かのショーかの様な演出に再び大広間は静まり返る。

「…紳士淑女の皆ｓ「あー　あー　マイクのテスト中」

暫くの沈黙の後に、スポットライトの光と約千人の視線を現在進行中で浴びている四人は自分達の喉にそれぞれの杖で魔法をかけ話し出す。しかし初っ端から格好良く紳士淑女の皆様、と決めようとしたリーの試みは空気を読んでいるのか読んでいないのか分からないリューゲの発言に遮られる。

「おい、お前空気読めよ」
「ごめんそういうの無理」
　本人達は真面目に話しているつもりなのだが側から見るとまるでコントをの様なやりとりに大広間のあちこちからはクスクスと笑いが起こる。
「えーでは仕切り直して…あ、もう堅苦しいの無しなでいくぞ」
「おいお前ら！ハロウィン楽しんでるか？」
　小さな咳払いの後に再び話し出したリーに続いてフレッドが生徒達に呼び掛けると。フレッドの問い掛けに生徒達はそれぞれ答えを返していく。
「楽しんでるに決まってんだろ！」
「お前ら暗くて飯食えねぇから早くしろー」
「飯は美味いぞ！ただ悪戯が足りん!!」
「もう悪戯は勘弁してくれ……」
「スネイプが青筋立ててキレかけだぞー　罰則頑張れよー」
「ヒャッハー!!最高だぜー!!」
　全体的に野郎が多い印象だが大体は楽しんでいる様子にリューゲ達四人はニヤリと笑う。
「最後から二番目～　俺らがそう簡単に捕まると思うなよ。それと最後の奴、お前は色々とヤバい。そして野郎しか答えてくれないのはなんでだ!?」
「お前のそういう考えが見え見えだからだよ、ジョージ。コメント返ししてないで続きいくぞ」
「オーケー、分かったよ。さて、さっき誰かが悪戯が足りないと言っていたな。それはその通りだ！今日はハロウィンなのに悪戯が全く足りていない。全くもって可笑しなことだ!!」
　一部おかしな所に突っ込んでいるジョージをリーが止めるとジョージは唐突に謎の演説を始める。
　するとリューゲ達もそれにノる。
「じゃあどうするか？」
「俺たちがやるしかない！」

「という事で俺たち『悪戯四人組』は」
「お前らに素敵なサプライズをする事にした」
　四人がタイミングを上手く合わせて計画の概要を話すと生徒達は歓声を上げる。
「おぉそんなに喜んでもらえて嬉しいな」
「じゃあ成功させないとな」
「だな」
「いくぞ」
「「「トリックオアトリート！」」」

　歓声が一度止んだところでリューゲ達は再び話し出す。そして四人で声を揃えて悪戯かお菓子かを生徒達に訊ねる。答えは当然のこと…
「「「「「トリック!!」」」」」
　大広間に集った生徒達のほぼ全員が悪戯を選び大声で宣言する。
　答えを聞いたリューゲ達杖を振ると大広間の天井に青白い光でカウントダウンが表示される。
　現在の残り時間は５秒。
「お前らも声を合わせて！残り５秒！」
「「「「「４!!」」」」」
「「「「「３!!」」」」」
「「「「「２!!」」」」」
「「「「「１!!」」」」」
「「「「「０!!!」」」」」
　生徒も、教師も思わず声を合わせて一緒にカウントをしてしまう。
　数字が減っていくにつれて大広間の緊張感は高まっていく。
　そして数字がゼロとなった瞬間…眩い光が大広を包み込み、皆が思わず目を瞑る。数秒経ち生徒達が目を開けた時には大広間は光を取り戻しリューゲ達四人は姿を消していた。
「へ？」

誰かが漏らした声が静まり返った大広間に響き渡る。
「おいおい、ちょっと待てよ。あんだけ期待させといて何もｎ……はぁ!?」
一見して何も変わっていないような様子に獅子寮の上級生の一人文句をを言う、が何故か途中で目を点にして教師陣の座るテーブルを呆然として見つめる。
「おーい、どうしちまった?あっちになんかあんｎ……ファッ!?」
フリーズした上級生の隣に座っていた友人は彼の視線の先に目を向けて又もやフリーズする。
「「「「「「っ!?」」」」」」
その様子に生徒達は一斉に教員テーブルの方を向き…驚愕した。
何故ならば…教師全員性別が反対になっていたからだ。
そして大広間は大爆笑の渦に巻き込まれた。
こうして悪戯四人組の最初の悪戯「教師性別逆転事件」は大成功で幕を閉じた。

4　近付く冬

変身術の教室の隣にある空き教室、リューゲは今朝届いた手紙の指示通りに手紙の送り主を待っていた。
指定された時間の五分前に来ていたリューゲだがいつまで経っても来ない送り主にいい加減しびれを切らす。右腕に付けた安物の時計を見るともう一時を過ぎていた。十分オーバーだ。
残り十五分で妖精の呪文の授業が始まってしまう。フリックウィッチ教授は厳しくはないが、ハロウィンの悪戯からまだそれ程時間が経っていない今遅刻するのはあまり良く無いだろう。
流石にもう帰っていいだろう、と扉を開けて教室から出ようとした瞬間向こう側から扉が開く。
リューゲは一歩後ろに下がってから、慌てた様子で教室に入ってきた女子生徒に話し掛ける。
「手紙を送ってくれたハッフルパフのアイラ・ログリード？」
「は、はい！　遅れて済みませんでした…」
「いいよ全然、授業には間に合うし大丈夫。で、要件は何？」
「す、す、好きです、お付き合いさせて下さい!!」
「…」
まぁ何というか予想通りの要件にリューゲは溜息を抑える。流石にここで溜息を吐いたらこの女子生徒に失礼だし可哀想だろう、という僅かに残った良心でリューゲは出来る限り彼女が傷付かないように慎重に言葉を選ぶ。
「……理由を聞かせて貰ってもいいか？」
「ハロウィンの時のレイさんの笑顔に一目惚れしました」
女子生徒はキラキラと輝く目でリューゲを見つめる。一方のリューゲは何度目か分からないやり取りに又もや出そうになった溜息を抑えて重い口を開く。
「ごめん、俺はその想いに応えられない」
「ッ!!」
リューゲが拒絶の言葉を言い終わる前に、女子生徒はその両目から

溢れ出る涙をローブで拭きながら走り去っていく。女子生徒が乱暴に開けた扉は大きな音をたてて閉じる。
「あーあ、可哀想に。勇気を絞って一世一代の告白をしたってのに冷たいねー」
「全くだ！これだから獅子寮の王子様、なんて言われるんだぞ」
女子生徒が居なくなるとリューゲ一人しかいない部屋に二人の声が響く。すると先程まで誰も居なかった空間にいつの間にやらフレッドとジョージが立っていた。
リューゲは自分の背後に立つ二人を振り返る素振りすら見せずに言う。
「誰がつけたんだよその渾名。それに傷付かない様に言葉は選んだ」
「知らないのか？　所々の黒が混じった真紅の髪に、燃えるような赤の瞳、成績優秀素行不良、スラリとした体型や立ち姿は好青年だが時折見せる笑みが無邪気な少年の様で最高にカッコ可愛いいって恋愛脳な女子達の話題だぜ」
リューゲは内心こっぱずかしい渾名に悶えながら二人に言う。
「ざっけんなと言いたい。獅子寮の王子様とかイタすぎるだろ。っていうかお前らもハロウィン以来モテてんだろ」
「話の変え方が露骨過ぎる件、まぁいいや。何にしろお前ほどじゃねぇよ」
「俺らは二人合わせて五人。リューゲは？」
「今月入ってから八人」
「マジかよ!?二日に一回ペースとか」
「お前男子には相当恨まれてるだろうな」
「色々と巫山戯んな」
そこまで話した所でリューゲは次の授業まで残り三分なことに気付き教室を出る。
今日の授業は浮遊呪文のその先の応用編だ。

三人が妖精の呪文の授業に遅れかけた日の夜。
食事が終わり、皆が談話室や温かい寮の部屋で宿題を終わらせたり雑談やゲームをしているであろう頃。
リューゲ達四人は禁じられた森の近くで森番の大男、ハグリッドの手伝いをしていた。
何故こんな時間に外にいるか、というと罰則だ。流石にあそこまで大騒ぎして何の咎も無し、というのはダメだそうでリューゲ達は３０点減点と森番の手伝いを課せられた。
最も点数の方は素晴らしい魔法の腕に、と５０点貰ったので結果的には得したし、森番の手伝いは罰則の中では割といい方なので大したことは無かった。
そして何よりもリューゲは森番に興味があった。
「なぁハグリッド、俺らの悪戯どうだった？」
ハグリッドの家の裏に置いてあった薪を魔法で割りながらリューゲは訊ねる。
「アレは傑作だったなぁ、お前さん達の悪戯は面白かった。正しく二代目悪戯仕掛け人だな」
「悪戯仕掛け人？　二代目ってことは俺らの前にそんな凄い悪戯をやった先輩がいたのか？」
昔を懐かしむ様な表情をしながらハグリッドが話した内容にリューゲは思わず薪を割る斧を休めて再び訊ねる。
「そうか、お前さんらの代はアイツらのことを知らないのか。今から十年程前にお前さん達みたいに大掛かりな悪戯をしてホグワーツを盛り上げていた四人組がいたんだ。そんでもってそいつらが悪戯仕掛け人、って名乗ってたんだ。アイツらもグリフィンドールで罰則を食らっては俺んトコの手伝いに来とった」
「わぉ！マジの先輩じゃんか!!」
そんな事を話していると薪を取りに行っていた三人が戻って来る。
「何サボってハグリッドと話してんだ。これ結構重いんだぞ、俺の代

わりに持てよ」
「「俺らの代わりもヨロシク♪」」
「ジャンケンで負けたお前らが悪い」
「何たる理不尽！」
　相当重かったのか地面に薪を置いた三人はフラフラしながら文句を言う。しかし物の見事にリューゲに論破され三人はぐうのねも出ずに地面にへたり込む。
　その様子を見てハグリッドは胸ポケットから薄汚れた懐中時計を出す。
「お、もう時間だ。もう罰則食らうような羽目するんじゃねぇぞ」
　その言葉を聞いてリューゲ達はそれぞれ挨拶をし、温かい寮に早く戻ろうと校舎に向かって走り去って行く。
　ハグリッドはその後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、斧と薪を片付けて自らの家の扉を開けた。

5　クリスマス休暇と獅子寮の謎

クリスマス前日、リューゲは頭を悩ませていた。リューゲを悩ませる原因は二つ。

一つ目は金欠。クリスマスプレゼントで見栄を張り、無茶苦茶高いモノを買ったせいでリューゲの財布はすっからかんだ。占いの館的な仕事で休暇前の財布はパンパンだったが、今では最早羊皮紙を買う金が無い、というレベルだ。このままでは昔の様にスリをする他なくなる。

そして二つ目は不思議な地図。これがまたとんでもない難題だった。

そもそも地図の隠し場所であるフィルチの部屋に入るためには悪戯をして捕まらなくてはならない。だがそれをすると寮の点数が減らされる。

それ以外の方法を取るならば裏道から入る他ないのだが、フィルチの部屋への入り口は上の階のある肖像画の裏側から入る他ない。幾ら城の抜け道を知り尽くしているリューゲでも、重力を無視して上の穴から脱出することは出来ない。

更に言うのならば始まりの言葉、とやらも文章からして夜にしか見つけられないだろうから夜間外出をしなくてはならない。夜間外出などバレたらいくら減点されるか分かったもんじゃない。

クリスマスの宿題は余裕のある日にさっさと片付ておいたので、逆に暇で仕方ない。

ハグリッドの所に行くにしてももう外は雪で一杯。寒い雪道を歩いてまで行く気にはならない。

結局やることが無くなったリューゲはまた何時もの様に安楽椅子の上で昼寝をする事となった。

目が覚めて一番最初に目にしたのはプレゼントの山だった。
昨晩、談話室の安楽椅子でそのまま寝落ちしたリューゲは、半分死んだ目のままプレゼントの開封作業を始める。
まず最初に開けたのは中くらいの包み。開けてみると大きくLとある、深紅のセーターが入っていた。一体誰からだろうとリューゲがメッセージカードを見ると、モーリー・ウィーズリーと書いてある。
ウィーズリーという事はおそらくフレッドとジョージのお母さんなのだろう。今年は何も贈っていなかったが、こんな手編みのセーターを贈ってくれるのならば来年はちゃんとしたものを贈らねば、とリューゲは早速来年のことを考え始める。
とはいえプレゼントはかなりの数がある。朝食を食べ逃さない為には早く開けなくてはならないだろう。
珍しく六時などという早起きができたリューゲは朝食の為にどんどんプレゼントを開けていく。
まずは知らない人や名前を知っている程度の人からのプレゼントを開けていくが、暫くしてリューゲはプレゼントの殆どが女性からだと気付く。
小洒落たチェスセットや黒のローブ、杖磨きセットに箒磨きセットなどといったそれなりのお値段をするプレゼントを贈って来ている人の名前をリューゲは近くにあった羊皮紙にメモしていく。この人達にはいずれお返しをしなくてはならない。そして貰ったものをリューゲは次々に小さくしていき、古ぼけたトランクに入れていく。
一方で食べ物や飲み物、香水などといった物は剣を振り、どんどん

消失させていく。
この手のものは運が悪いと惚れ薬が入っている可能性もある。リューゲの場合フった女の子は大勢いるので更に危険だ。
次々とプレゼントの仕分けをしていくと後に残ったのは差出人不明のプレゼントと親友達、ハグリッド、そして今回のメインの大きな箱だけになった。
まず最初にハグリッドの包装を開けてみる。恐る恐る中を覗くと大きな箱の割に中には何本かの細いので棒が入っているだけだった。不審に思ったリューゲは一緒に入っていたハグリッドからのメッセージカードを読む。
「お前さんに頼まれたもんは無事完成だ。よいクリスマスを過ごせよ!、か。」
そう、このプレゼントはリューゲがハグリッドに頼んだものだった。正直どんなものが来るのかとドキドキしていたがハグリッドはその巨体に似合わず器用で繊細らしく、リューゲの注文通りだった。
嬉しくなったリューゲはその流れのまま、差出人不明のプレゼントを開ける。
そして中に入っていた物にゲンナリした顔をする。本だ。だがまぁ仕方ないので貰っておこうとリューゲは本を手に取り表紙を見る。
「世にも奇妙な魔法薬　九十九選」、「魔法とは?　魔力とは?」、「魔法界の常識」、「魔法族の嗜み」、「魔道具の作製方　初級」、「魔道具の作製方　中級」
全体的におかたそうな本が多いが悪戯に役立ちそうな本も多い。贈ってきたのが誰かは分からないが、誰かさんにリューゲは少しだけ感謝し、今度は親友たちのプレゼントを開けることにする。
まずはフッドとジョージのプレゼント。中身は魔法界のお菓子詰め合わせと悪戯グッズ、そして新しい悪戯グッズの設計図だった。なんというか…いい意味で予想通りだ。
まぁ何にしろ今のリューゲには嬉しい物が多い。特に悪戯グッズはフィルチを誘き出すのに使えそうだし、設計図の方は材料さえ用意

できれば暇をつぶすのには最高だ。
自分の贈ったプレゼントを彼らが喜んでくれればいいが、と考えながらリューゲはリーの包みを開けていく。
包装紙を取り外し袋の中を覗いたリューゲは中に入っていた物に息を飲む。
透明マントだ。最も〝本物の〟透明マントでは無いのは明らかだが、魔法生物の皮で作った透明マントもかなりの効果があるし、値段も相当だ。
リーの家は立派な家系だが、俗に言う名家レベルではない。今のご時世に余程いい家でも無ければ、こんな高価な物をたかが息子の友人のために買ってくれる親がいるとは思えない。慌ててメッセージカードを見るがそこには『よいクリスマスを』としか書いていない。
呆然としたリューゲが冬休み明けの予定にリーをとっちめる、の欄を作っておこうかなどと考え始めた時、リューゲは透明マントの使い道に気付く。
このマントでも効果は十分ある。フィルチの目を誤魔化して部屋に入るくらい造作無いだろう。
それにこれがあれば夜間外出も楽勝だ。流石にダンブルドアは無理だろうが夜間の見回りの教師にもどうにか見つからないよう立ち回れるだろう。
今後の目標を見つけて急にやる気が出てきたリューゲは最後に残った大きな箱を開ける。
その中に入っていたのは一枚の板…ではなくスケートボードだった。
フクロウ通販「魔女の市」では様々な物が売っており、これはその中の格安品のパンフレットから見つけたものだった。最近マグルの間で流行っているスケートボードだが、魔法族には不人気のようで折角仕入れたはいいものの、結局全く売れず値引きされていたコレはまさに掘り出し物だった。
さて、ここでそもそもリューゲはスケートボードが出来るのか？ということになるのだが実はリューゲはスケートボードが大の得意だ。

スラム街に住んでいた頃、よく買い出しに行った店の店主に教えて貰っていたのだ。最初は店主の姿を見て、面白そうと思った程度だったが一度やった後はどんどんのめり込んでいき、いつしか店主よりも上手くなっていた。

スケートボードには結構なお金がかかったが、リューゲは趣味の為ならお金は多少工面できるタイプの人間だったので、一時期は稼いだ金ほぼ全てスケートボードの部品の交換に回していた。

何故リューゲがこれを買ったかというと、ズバリこれを改良して自分だけのスケートボードを作りたい、という願望があったからだ。

そしてこれから作業を始めたいと思ったが…もう時間だ。

貰ったプレゼントで色々試したいことはあるが今はそれは後回しだ。取り敢えずは朝食に向かわないと昼食前に餓死してしまう。

リューゲは剣を振り談話室を少し片付けると、寮を飛び出し大広間へ向かう。

今日はクリスマス、いつもに増して豪華であろう朝食を、存分に味わおうとリューゲは駆け出した。

6　夜の冒険と忍びの地図

一夜明け、リューゲは朝っぱらからスネイプに詰問されていた。
「では、本当に昨日の夜は出歩いていなかったと？」
「当然じゃないですかスネイプセンセ！俺は模範的で成績優秀な優等生ですよー？」
「…成績優秀　素行不良の問題児の間違いだな」
「またまた御冗談を！」
の、だが流れる様に自然に嘘が出てくる口のお陰でリューゲはいつも通りに、ニカニカ笑っていた。
無論矛盾点などないし、リューゲの嘘がバレることはない、筈なのだが…。
「嘘を吐くな。夜間外出と教師に対する不敬で１５点減点」
「……もう一回お願いします」
「１５点減点」
「…俺の耳ついにぶっ壊れたらしい」
「１５点減点だ」
「ふざっけんなー!!」
「五月蝿い、プラスで５点減点だ」
「……加点してください」
「駄目だ」
「クリスマスプレゼントで本あげたじゃないですか」
「賄賂のつもりか？というかあの中々に面白そうな香水も貴様からだろう」
「……ノーコメントで」
「とっとと帰れ」
誠に遺憾なことにスネイプには通じないらしい。
こうしてグリフィンドールの寮杯への道は遠ざかっていく。

朝っぱらからスネイプの説教を食らったリューゲは朝食を食べずに、寮の部屋に戻る。
机の上に広げてあったのは一枚に古びた羊皮紙だった。
これが昨日の帰り道に手に入れた戦利品。
暫くの沈黙の後、リューゲは苦労して得た合言葉を言う。
「我。ここに誓う。我、よからぬことをたくらむ者なり」
はたから見れば完全に痛い人だがこれはこの「忍びの地図」を起動させるため。
そして羊皮紙は動き出す。
黄味かかった羊皮紙に真っ黒のインクが浮かび上がる。インクは蠢き出し、次々に文字を作っていく。
数秒後…リューゲの前にあったのは古びた羊皮紙などではなく、正真正銘の「忍びの地図」だった。
どうやらこの地図、何処に誰がいるかも分かるようで今大広間にはマクゴナガルしか居ないのが分かる。
更に、ふと校長室を見てみるとダンブルドアとスネイプが話しているのが分かる。流石に内容までは分からないがこの地図は凄すぎる。いくら効果範囲がホグワーツ内部のみ、とはいえどうやったらこんな地図を制作できるのだろう。
苦労して手に入れた甲斐があった、とリューゲは安堵の溜息を吐く。
昨日リューゲは天文台の一番上で鍵穴となるものを探していた。

だがいくら探してもそんなものは存在せずリューゲは一言叫んだ。
二代目悪戯仕掛け人！、と。
そしてその瞬間リューゲが持ってきた彼らからのメッセージの文字が変化して先程の合言葉が浮かび上がったのだ。半ば破れかぶれでやったので正解だったのには当のリューゲも驚いた。
そして合言葉を手に入れたリューゲはその足でフィルチの部屋にも忍び込み、危険物に棚からこの羊皮紙を、忍びの地図を拝借してきた、というわけだ。

「最高のクリスマスプレゼントありがとさん、悪戯仕掛け人」

リューゲは忍びの地図を机の奥に突っ込むと寮の部屋を出ていった。

7　ただいま、お帰り

結局リューゲがファンクラブの意味を教えて貰えないまま、日は沈み夜を迎えた。
そして四人は談話室の隅で、朝できなかったリューゲのプレゼントの話の続きをしていた。
「それでさっきの続きだがあのネックレス出してくれるか？」
リューゲの言葉に三人は頷くとリーはポケットから、フレジョは制服の下からリューゲが贈った黒紐に銀のリングが付いたネックレスを取り出す。リューゲは三人が取り出したことを確認してから口を開く。
「そのリングあるだろ？　そのリングの中に鏡、というかガラスみたいなのがあるの分かるか？」
「鏡？　あ、あった。あった」
「これかー　気付かなかったな」
「お、発見。っていうかよくコレ紐通すぶんの穴開けれたな」
「結構難しかった。それで、だ。それは一般的に両面鏡と呼ばれているものを俺が独自に加工した鏡だ」
リューゲは自分のネックレスを使って説明する。
「ガラスみたいに透明なのになんで鏡ってことなんだが…やってみるのが早いな。その鏡の部分を二回軽く触ってみろ」
リューゲの言葉を聞いた三人は早速やってみる。すると…
「「光った!?っていうか俺らの顔が出てる!?」」
「三分割されてんな。自分以外の顔が映ってる感じか」
透明だった鏡は青い光で三分割され、そのそれぞれに自分以外の三人が映し出された。
「離れた所からでも連絡出来るように、声も伝わるようになってる。両面鏡を三枚買ってそれをいろいろ加工した結果こうなった。あ、高かったから絶対壊すなよ」
「なんかもう…」
「流石リューゲというか…」

「改めてお前天才だわ…」
呆然とした顔でリューゲへの驚きを表す三人にリューゲはニヤッと笑う。
「いいプレゼントだろ？」
三人は満面の笑みを浮かべて声を揃えて言った。
「「お前最高!!」」

「そういえば…リーのアレはどうしたんだ？」
フレッドはリューゲのプレゼントの説明が終わると、今度はリーに透明マントのことを訊ねる。
するとリーは嬉しそうな顔で話し出す。
「あぁ、あれな。あれはな――――親父がくれたんだ」
「リーの家って実はお金持ち？」
ジョージのかなり無遠慮な質問にリーは苦笑して首を横にふる。
「違う、違う」
「じゃあ何でそんな高価なもん持ってんだ？普通使い所もないから買わないだろ」
「簡単に説明するぞ。親父も昔ホグワーツ居たらしいんだがその頃悪戯がブームだったらしい。で、親父とその仲間達も夜間徘徊にハマったらしく全員のお小遣いフルで使って透明マント四枚買って使ってたんだ。そんでもって、俺が休暇で帰った時にハロウィンの悪戯の話したらお前らの事気に入ったらしくコレやる、っってくれたんだよ。以上説明終了。理解できたか？」
「……親父さんにアザッスって伝えといてくれ。あれのお陰で休暇を退屈しないで過ごせたし、お前らへのもう一つのプレゼントも見つけられた」
「「俺らからもヨロシク♪」」
「手紙出した時に伝えとくよ。そういえばその例の地図もまだ見せて貰ってないから早く見せろよ」

透明マントの経緯を話し終わったリューゲ達四人は部屋にある地図を見るために立ち上がり、歩きながら喋る。忍びの地図についてはリューゲは既に妖精の呪文の授業の時に三人に話していた。

忍びの地図を見たリーの第一声は
「悪戯仕掛け人いい仕事するなぁ」
だった。
一方フレッドとジョ……フレジョは驚きのあまり声も出ないようでぽっくり口を開けたまま固まっている。
流石にもう数十秒経ったのでリューゲが頭を叩くと今度は二人で手を繋いで踊り始める。
リューゲはため息を吐いて言う。
「テレビは叩けば直ると聞いたが…こいつらにやると余計おかしくなるだけなのか」
「魔法使って岩でぶん殴ってみれば?」
リーの物騒な提案にフレジョは踊りを止め冷や汗を流す。
「じょ、冗談」
「だよな…?」
「実際にやろうと思ってたんだが」
「「死ぬからやめてくれ」」
「冗談だ」
そのコントのような掛け合いにリューゲはボソッと呟く。
「お前らマジで芸人なれよ」

8　大繁盛

切っ掛けは簡単な事だった。
休暇が終わってから丁度一週間経った日。

リューゲ達は折角手に入れた忍びの地図を使わないなんて勿体無いと、授業をサボった挙句廊下に「鼠花火」というジョージ考案、リューゲ作成の新悪戯道具をバラ撒いた。
この鼠花火、実は中々に厄介で内部の動力源が大丈夫な限り永遠背中から花火を打ち上げる上に、基本的に魔法が効かないので普通に捕まえて至近距離から魔法を撃つか物理的に壊すほかないのだ。更にいうのならば凄まじく反応速度が速いので一部の効果がある魔法も避ける。そして追加で花火は爆音効果があるため廊下でバンバンやれば教室まで音が届く。
何故そんなのを使ったかというと…要は教師＋生徒に対する挑発と挑戦状だった。
教師には捕まえてみせろと、生徒にはお前らもコレくらいやれということだ。

最終的にリューゲ達は忍びの地図と透明マントを最大限活用し、フィルチと教師から逃げ切った。
そして爆音を聞いて、教師の制止を聞かずに教室から出て来た生徒に向かって四人は言った。
俺らを超す悪戯仕掛け人がいるもんなら来てみやがれ、と。

そしてその結果が現在の阿鼻叫喚という言葉が相応しいホグワーツだった。
何があったかを簡単に説明すると
四人の挑発
←
生徒達がノる
←
いつでもどこでも悪戯が起こるようになる
←
いつの間にか廊下を歩けばクソ爆弾が飛んでくる世紀末（？）に
←
現在
という訳である。当然参加しない生徒もいたが、多くの生徒は暇潰しに丁度良いということもあってか積極的に参加した為、常に周囲を警戒しなくてはならないサバゲー状態となった訳だ。
二週間経った辺りから大広間や廊下でも普通に上空を物が飛び交うようになり、二週間と四日が経った頃には医務室のベッドはおろか床も満杯となり、医務室のマダム・ポンフリーもマジギレしていた。

そしてそんな色々と世紀末なホグワーツだがそのホグワーツを、現状誰よりも楽しんでいたのはリューゲ達四人だった。
「流石にこれはヤバイな」
「とはいえコレ俺らがやったって考えたら俺ら凄くね？」

「少なくともお前は全然すごくない」
余裕綽々な雰囲気で堂々と廊下を歩く四人には次々とクソ爆弾が投げられるが当然そんな物にやられる四人ではく、それぞれ杖で、足で、魔法で投げつけられる物を投げ返していく。
「でも最近談話室でも寝れないからそろそろこれ終わらせよっか」
「だな」
「了解」
「異議なし」
リューゲ達は中庭に向かう。
道中何度も襲撃されるが、全ての攻撃を避けホグワーツで現在唯一の安全地帯となっている中庭に無事辿り着く。何故ここが唯一の安全地帯かというと、この戦いが始まって三日目にダンブルドアがそこに守護の呪文をかけたからだ。まぁそのお陰で校長にも許可を貰えたから、ということで心置きなく暴れまわる者が増えたのも事実だが。

リューゲは中庭の中央で手持ちの最後の花火五本を打ち上げる。五つの花火は分裂したかと思うと、空に「ｔｉｍｅ　ｕｐ！」と大きな文字を映し出し爆音をたてる。
その様子を見て生徒達は一斉に手を止める。そしてリーが予め校内に仕込んでおいたスピーカー擬きを介して全校生徒に宣言する。
『時間切れ、という事で〝第一回〟　悪戯中　ｉｎ　ホグワーツを終了しまーす。参加者は全員校内清掃するように！それと悪戯中が楽しかったと思う奴らは是非俺ら悪戯仕掛け人に言ってくれ。俺らが卒業するまでにもう一回くらいやる予定だからな。それと今回俺らが無料配布した悪戯グッズは明日からセットで八ガリオンで販売する。では各々自分がした悪戯の片付け作業に入ってくれ』
こうして多くの教員の頭を悩ませた、第一回　悪戯中は無事（？）終了した。

悪戯中の終了から五日。
廊下や大広間での乱闘騒ぎが起こることはなくなった。が、医務室のベッドが満席なことは未だ変わりない。
その原因は…
「クソ爆弾、鼠花火、煙玉、嘘つきボウシ、身代わり案山子……ｅｔｃ　ｅｔｃ　全部合わせてたったの八ガリオン！一日限定三十個だから悪戯好きのお前らは急げよー」
「二セットくれ!!」
「俺が先だ、五セット!!」
「はーい、今ので終了ー！」
「十ガリオン出すから一個くれ!!!」
ギャンブル中毒ならぬ悪戯中毒化した生徒達に悪戯グッズを売りつける悪魔（リューゲ達四人）だった。
連日販売所となっている中庭に押し寄せる生徒達のお陰でリューゲ達はボロ儲け状態だった。
「いやぁ、今日も売れたなー」
「だな。そういえば最近追っ手のレベルが上がってるぞ。さっき裏道使って近道したのにどうやったかしらないけど、フィルチに回り込まれて結構危なかったからお前らも気を付けろよ」
フレッドの言葉にリーは肯定を示した後に、三人に警告する。
実際三人も最近教師がやたらと追いかけ回してくることに気付いていた。
「まぁとはいえ」
「俺らが」
「捕まるわけ」
「「無いけどな！」」
「相変わらずなコンビネーションだと思ったらフレジョだけじゃなくてリーも参加すんのか」

「お褒めの言葉ありがとさん！そういえば何でリューゲ俺らのこと略すの？」
「長いから」
「ヒドい！」
リューゲ達は今日の売り上げを数え終わると、何時ものように軽口を叩き合いながら寮へ帰っていった。